

郷の金額が最も高かった理由であろう。それは、私学校、西南戦争まで持ち越され、また、大津事件直前の西郷生存および帰国言説にまで、否、現代の「西郷どん」人気まで行きつくかもしれない。

歴史的に実に貴重な史料であるといえよう。金額が高いか、低いかは問題ではないのかもしれない。

参考文献

藤村泰夫監修『神奈川から考える世界史』えにし書房、2021年
 岩下哲典「徳川政権、文と武の相克—ペリー来航から明治維新への道—」同編『「文明開化」と江戸の残像』ミネルヴァ書房、2022年

(令和4年9月例会)

緒方家と森鷗外

石井 元章

文京区向丘の高林寺にある緒方洪庵の追頌碑文を明治45年に森林太郎(鷗外)が撰じたことはよく知られている。しかし、緒方家と鷗外の関係はそれだけに止まらず、当時のイタリア王国ヴェネツィア市に斃れた、洪庵の五男惟直が遺した娘、エウジェニア=ジョコンダ=豊が森を介して来日することになる。本発表ではその経緯を紹介する。

惟直は1876年11月から1878年3月までヴェネツィア商業高等学校領事科で学ぶとともに、日本語を教えた。その間ヴェネツィア生まれのマリア=ジョヴァンナ・セロッチェと恋に落ち、1877年9月10日に娘のエウジェニア=ジョコンダ=豊を授かる。壊血病に冒された惟直は1878年4月4日に妻の家で息を引き取るが、命の危険を察知した惟直はその4日前に受洗し、カトリック教徒としてマリア=ジョヴァンナと正式に結婚していた。4月6日に日本人として唯一サン・ミケーレ島記念墓地に埋葬された惟直の墓は、この時点では共同溝であった。

一方、商業高等学校第4代日本語教授は岩手県一関田村藩出身の長沼守敬で、彼は1881年から1887年までヴェネツィア王立美術学院で彫刻を学び、帰国後に東京美術学校に奉職する。長沼は1884年の終業式において賞賛を受け、その技倆を見込んだ日本名誉領事グリエルモ・ベルシェが、惟直の墓の制作を長沼に依頼する。惟直の遺体は1884年12月22日に共同溝から掘り起こされ、完成した大理石墓に移された。

長沼は、帰国前に日本人の知己を頼って1886年にヨーロッパを周る。最初の訪問地ミュンヘンで7月15日に同市留学中の森鷗外と会った時に、洪庵の六男取次郎の同級生森は長沼に惟直のことを尋ね、長沼はその娘についても告げる。森は驚き、その情報を早速大阪の取次郎に伝える。1889年からドイツに留学した取次郎は、名誉領事ベルシェを介してやっと姪の消息を掴み、マルセイユに來させたらうえ、日本へと連れ帰る。

(令和4年9月例会)

緒方家に迎えられた エウジェニア=ジョコンダ=豊の生涯

緒方 洪貴

エウジェニア=ジョコンダ=豊は緒方洪庵の第

10子である惟直(十郎)とイタリア人のマリアの